

THE FLUTE

10月号

COVER STORY
マリオ・カーロリ

Vol. 171
2019 定価 1,080 YEN



Mario Carri

Interview

安田美充央
ハロクライン

特別追悼企画

“ボサノヴァの父”
ジョアン・ジルベルト

特別企画
2019年下半期
見たい、聴きたい、吹きたい!

音楽映画

新連載

ピッコロ★トリセツ講座
スタニスラフ・フィンダ

Special Contents

レパートリーを広げよう ～新世代の人気曲をモノにする～

『EARTH』(村松崇継 作曲)
advice by 高木綾子

『後悔と決心』(ゲイリー・ショッカー 作曲)
advice by 栗田昌英

『Deep Blue』(イアン・クラーク 作曲)
advice by 立花雅和

『Lemon』(米津玄師 歌／作曲)
『スパークル』(RADWIMPS 歌／野田洋次郎 作曲)
advice by 尾崎勇太

『星のセレナード』(セシル・シャミナード 作曲)

SCORE

—特集連動—
『Lemon』
米津玄師 歌(F1ソロ)
『星のセレナード』
C.シャミナード 作曲(2FL)

『いのちの歌』
村松崇継 作曲(F1+FL)

あふれ出る・自分の音楽を伝えること



Mario Caroli

マリオ・カーロリ

Mario Caroli

マリオ・カーロリ

6月に行なわれた東京オペラシティの同時代音楽企画「コンポージアム2019」で、フィリップ・マヌリによるフルートとオーケストラのためのコンチェルトを日本初演したマリオ・カーロリ氏。フランスはストラスブール地方音楽院での留学時代、カーロリ氏に師事し、自身も現代音楽の分野で活躍中の若林かをりさんがインタビューした。

聞き手:若林かをり／写真:森泉匡／取材・撮影協力:東京オペラシティ コンサートホール

個性を最大限に伸ばすこと

——先生は、以前にもTHE FLUTE誌のインタビューを受けていらっしゃいますね。私の自宅には、先生の写真が巻頭を飾った当時の雑誌が今もあります。今回、このような形で先生にインタビューできることを、とても嬉しいと思っています。

カーロリ(以下C) (2005年に表紙を飾った自分の写真を見ながら)若いなあ～！もうこの時のインタビューから14年も経つんですね。懐かしいなあ。

今回撮影していただいた写真もとても気に入っています。掲載されるのが楽しみだよ。

——先生は、現在、私がお世話になったフランスのストラスブール地方音楽院の他に、ドイツのライプツィヒ音楽大学でも教鞭をとられていますね。

C ライプツィヒ音楽大学で教え始めてから、今年で4年目になります。オーレル・ニコレ氏、フェリックス・レンゲリ氏など、素晴らしいフルーティストが教鞭をとった由緒ある音楽大学のポストに就任できたことは、とても名誉なことだと思っていますし、同時に責任も感じています。

——生徒はどのくらいいるのですか？

C ストラスブール音楽院には8人、ライプツィヒ音楽大学には14人が在籍しています。ライプツィヒ音楽大学には、すでにプロのオーケストラのポストを得ながら、大学に通っている学生もいるんですよ。

——私も今では生徒を教える立場になりました。生徒の力を伸ばす秘訣は、何でしょうか。

C 教師の役割は、生徒の個性を最大限に伸ばす手助けをすることだと思います。これはどちらかと言うと、メンタルあるいは心理学的な問題だと言えますが、人にはそれぞれ人格があり、個性を持ち、興味も嗜好も違います。音楽の捉え方や感じ方も違うでしょう。大学に入るくらいの年齢になると、

学生たちは既に個性や嗜好性を持っています。深い音色を持っている人、またはブリランテな音色を持つ人、軽い音色を好む人など、音を比べただけでも様々です。各々の生徒が指向するものを、その方向性を崩すことなく最大限に開花させること。一人の音楽家として、将来にわたって、その人それぞれの持つ方法で音楽表現ができるように、生徒一人一人に合った方法を見出して、可能性を開いてあげることこそが、教師の役割だと思っています。

間違っても、教師が自分の好みや主観を生徒に押し付けるようなことは、決してしてはいけません。

——先生が「よい教師とは、生徒の音楽性・技術を伸ばすために、その時に必要な、最適な課題を与えられる人であること」とおっしゃっていたのをよく覚えています。

C あなたのように、自分が教えた生徒たちがその後活躍していることは、私にとって大きな喜びです。生徒たちの活躍や成功は、私自身の教育へのモチベーションにも繋がっているんですよ。

——ありがとうございます。私も先生のような素晴らしい教師になれるよう、頑張ります。今後、留学を考えている若い日本のフルーティストにアドバイスをいただけますか？

C ヨーロッパの音楽大学の入試では、音楽性やアーティスティックな要素・素質が重視されます。テクニックもちろん大事ですが、入試の段階では、完璧なテクニックというよりも、その受験生から音楽性を感じるか、表現したいことがあるかどうかのほうが重要な評価基準になります。

日本の皆さんには、初めての場で自分を表現することが苦手な人が多いと思いますが、ヨーロッパ人だって、同じように緊張するのです。毎年、指が震えながら演奏する受験生を見かけます。緊張の度合いはどうであれ、その人からあふれ出る音楽が聞こえてくるかどうか。小さなミスに臆することなく、自分の音楽を審査員に伝えることを忘れないでください。



「コンポージアム2019」での『サッカード』演奏

©大庭道治 写真提供:東京オペラシティ文化財団

Profile Mario Caroli マリオ・カーロリ

ボローニャでアンナマリア・モリーニ、ウィーンでマヌエラ・ヴィースラーに師事。22歳の時にダルムシュタット国際現代音楽祭にて、クラーニッヒシュタイナー音楽賞を受賞。現代音楽の分野で活躍するきっかけとなり、シャリーノ、クルターグ、細川俊夫、リーム、湯浅謙二、サーリアホなど多くの作曲家の信頼を受けています。現在ではパロックや古典派にまでレパートリーは広がり、その清新な解釈は高く評価されています。ソリストとして、フィルハーモニア管、フランス放送フィルなど世界中のオーケストラに招かれておりほか、40枚以上のCD録音や、フライブルク音楽大学および世界各地でのマスタークラスなどで後進の指導にもあたっています。

オフィシャルサイト <http://www.mariocaroli.it/>

フランス音楽が見え隠れする現代作品

——さて、今回演奏されるフィリップ・マヌリのフルートコンチェルトについてお聞かせください。マヌリ氏は現在、ストラスブール音楽院の作曲科で教えていて、先生の同僚でもありますね。

C 今回の『サッカード』というフルートとオーケストラのための作品の世界初演は、エマニュエル・パユの独奏によって、昨年ケルンで行なわれました。この作品の日本初演でのソリストとして、素晴らしい東京オペラシティコンサートホール：タケミツメモリアルで演奏できることを、とても幸せに思っています。

——ゲネプロを拝聴しましたが、作品からはドビュッシーやブーレーズなどを彷彿させるようなフランス音楽の伝統の響きを感じました。またフルートのパートは大変技巧的で、パワフルな印象を受けました。

C その通り、ドビュッシーやラヴェル、ブーレーズなど、フランスを代表する作曲家たちの作品の引用がたくさん見え隠れする作品です。独奏パートにはラヴェルのバレエ音楽『ダフニスとクロエ』の有名なフルートソロの後に出てくるメッセージが、原曲そのままの調で出てくるんですよ。

全曲を通じて、独奏パートは、ソリスト的な位置付けというよりは常にオーケストラと対話する室内樂的に創られています。確かに複雑で難易度の高い作品ですが、オーケストラとのアンサンブルをよく考えて書かれていますし、共演する東京都交響楽団も素晴らしいオーケストラなので、初回のリハーサルから特に大きな問題もなく最後まで通すことがで

きました。この新しい作品が、フルート協奏曲のレパートリーとして位置付けられるよう、多くのフルーティストにチャレンジしてほしいと思っています。

——先生は、定期的に日本でも公演されていますね。これまでに何回くらい来日していらっしゃいますか？

C 今回で35回目くらいになるのではないでしょうか。すでに正確な回数を数えられないほど、来日しています。1998年に初めて「秋吉台現代音楽祭」に招かれてから、ほとんど毎年、多い時は数回にわたって演奏会やマスタークラスに訪れています。今年は9月に行なわれる「武生国際音楽祭」のために再来日します。実は日本は、私の出身国であるイタリアの次に、たくさん演奏会を行なっている国なんですよ。

——日本にとても親しみを持ってくださっているように感じます。

C 日本は私にとって、とても居心地が良い国なんです。前世で一度は日本人に生まれたんじゃないかと本当に思っています！一言で言うのは難しいのですが、これまで何度も“自分は日本人ぽい”と思うことがありました。

——それは例えどんな点でしょうか？

C 例を挙げるなら、日本では、皆さんが当たり前に周りの人に気を配って、他人への礼儀をわきまえて生活しています。私にとっても、それは当たり前で自然なことなのですが、ヨーロッパでは時々、びっくりするような無礼な行動を平気でする人たちがいます。そのような場に出くわしては、未だにショックを受けますし、これからも自分にとって“当たり前”や



“自然なこと”になるとは思いません。

ほかにも温泉が好きだし、日本食も大好き。日本の文化……例えば書や生け花の美しさも、私にとっては、単なる“クリシェ”としての美しさではなく、とても自然に、まるで日常の一部のようにすっと自分の中に入ってくるんですよね。

——先生は、以前、日本人といるのは居心地が良いともおっしゃっていましたね。

C はい。私は幸運なのかもしれません、私がこれまで出会って関わってきた日本人の方は生徒を含めて、皆、礼儀正しく、人に対して尊敬の念を持って接することができる方々でした。そして生徒はみんな、真面目で練習熱心!!

これは、日本人の国民性の良いところの裏返しとも言えるでしょうけれど、目上の人や初対面の相手に対して萎縮しそうる・控えめすぎる傾向を感じることもあります。ですが、一緒に過ごしていくうちに、一度信頼関係を築くことができれば、本音で深いコミュニケーションが取れるようになります。このような人間関係の形成は、私にとって、とても魅力的で素敵なことです。

無限の可能性、優雅さとしなやかさ

—— そういえば、これまで使ってこられた楽器もすべて日本製ですね。今回、コンセルトで使われるフルートについて教えてください。

C ミヤザワフルートのプラチナフルートで、台座、ポスト、キイの部分は14金のモデルです。この楽器とは、2007年にストラスブルで出会って以来、12年間の付き合いになります。

—— その楽器に、どのような魅力を感じていますか？

C 無限の可能性を秘めた、魅力あふれる楽器です。まず、音のクリアティビティが素晴らしい。音程もとてもいいし、楽器自体のフォルムが宝石のように美しく、触り心地も気に入っています。

います。プロガーシステム[®]によって安定したメカニズムを持っていますので、これまで一度もメカニカルでのトラブルがありません。私にとっての日本文化の特徴は、洗練された優雅さやしなやかさなのですが、ミヤザワフルートは、まさにそういった日本のイメージそのもの。素晴らしい楽器です。

※著名なフルートメーカーであるヨハン・プロガー氏がデザインした、ピンレス・メカニズム。ミヤザワフルートが特許使用権を持つ。

—— 最後に、今後の活動について教えてください。

C 実は、今年度でストラスブル地方音楽院を退職することになっています。来年度からは、フライブルク音楽大学での教授職に加えて、フライブルクを拠点に世界的に活動している「アンサンブル・ルシェルシュ(Ensemble Recherche)」に、フルーティストとして参加することになっています。

—— ええっ、そうだったんですか！ ……ということは、来年からは、定期的に先生の演奏がアンサンブルで聴けるようになるんですね。ますますのご活躍を日本から願っています！



インタビューで愛弟子でもある若林かをりさんと